

剣山のミヤマクマザサ

本田 耕一

古来より高山は霊峰と呼ばれ、人々の信仰の対象となつて来た。数多い高峰の中でも富士山は日本一の山である。夏の山開きでは大勢の登山客が列をなして頂上を目指すコースが流れる。

コロナ感染が拡大していた時は、山小屋は特に密度が高くなると敬遠され登る人は激減した。そんな時に友人から電話があり、富士山に登りに行きませんかと誘われた。別の友人と計画していたが都合が悪くなつたらしい。宿泊先は予約してあるという。彼は私より少し年上なのだが、大山や石鎚山など登山経験が多い。

私は趣味に週一回のボーリングをするくらいで定期的な運動はしていない。有機稲作家なので農作業は一年中して

いるが登山とは使う筋肉が違う。ただ、高校までは陸上競技をしていたこともあり基礎体力には自信があった。三年前にはいきなり四国八八か所の歩き遍路に挑戦し四五日間で完歩、満願したこともある。まだ登ったことがない三七七メートルの富士山に心が動き連れて行ってもらうことにした。

日程は前日に五合目の登山宿に宿泊して、次の日の早朝出発、山頂まで行って夕方に帰ってくる弾丸登山に近いものだった。ゆっくり登れば大丈夫と思っていたが、八合目を過ぎたあたりから、空気が薄くなったのか急に体が重くなり足が前に進まない。頭痛もしてきた。頻繁に休憩をするのが息苦しさが増すばかりだ。何とか頂上にたどり着いた

ものの、盛夏にもかかわらず気温は五℃ほどで、徳島の冬並みである。霧が出て小雨もばらついてきた。山上に鎮座する神社にお参りして、火口周辺のお鉢巡りを達成してから下山した。霊峰の神々しさを堪能する余裕はなかった。

徳島の霊峰といえば剣山。標高一九五五メートルで西日本第二の高峰である。

中学校の同級生に山好きがいて週末になると登山三昧。三〇年ほど前のある日電話があつて、剣山に登山リフトができてから観光登山客が増えて登山道にごみがたくさん捨てられていた。ごみを持ち帰るクリーン運動をするので参加しないかとのこと。環境問題には関心があつたので早速参加表明。私は高校二年の夏休みに生物部の植物観察会に参加して頂上に登ったのが最初でそれ以来だ。キレンゲシヨウマという希少植物の花が目的だったが好きな女の子が参加するので付いて行つたのである。

活動は見ノ越の駐車場から山頂までの山道を上り、各自昼食をとり、帰り道で空き缶などのごみを拾いリフトを使って見ノ越まで持ち帰るといふもの。運んだごみ袋で自治体が用意してくれたトラックの荷台がいっぱいになつ

た。

同時に登山道途中のごみ箱を撤去し、ごみは持ち帰るところを徹底するように県に要請を続けた。毎年の活動で効果がでて登山道はきれいになりごみの持ち帰りも定着したところに、新たな問題が生じた。観光客が増えて山頂でお弁当などを広げるために、以前は山頂を覆っていた笹が後退してはげ山のようになつた。緑豊かだった笹を復活させようと「剣山の笹をよみがえらせる会」の発足が話し合われた。準備会では広く県民に訴えるために署名活動などが行動方針にあげられた。そして、代表をだれにするかが議論された。登山愛好家だけでは限界があるので、だれか有名人になつてもらふのはどうか。徳島出身の瀬戸内寂聴さんをお願いできないか。私は当時寂聴塾一期生としてよく新聞などに出ていたので、寂聴さんに取り次いでもらえないかと頼まれたのである。

寂聴塾生には特権があつて、塾生を名乗つて京都の寂庵に電話をすれば在宅の時は先生とお話ができた。留守の時でも秘書の方が連絡してくれて、私に直接電話があつた。今回も先生は依頼の内容をしっかりと聞いてくださり、「考

えてみましょう。でもその活動をしている人はどんな人なのか会って話を聞いてみないとどうとも言えないわね」と返答された。電話の内容を会のメンバーに伝えると、代表者たちが京都を訪問することになり、私も同行した。

応接室の大きな座卓を囲んで待っていた私たちの前に法衣姿で現れた寂聴先生は、「よくいらっしやっただわね」と笑顔で言葉をかけられた。山の会の人たちは正座し、先生に資料を示しながら活動の内容や剣山山頂の現状などを説明した。何度も頷きながら聞いていた先生は、説明の区切りがついたところで唐突に質問した。

「あなたたちは剣山の自然が大好きなようだけれど、どういふ部類の人なの。塾生の本田さんの紹介で話を聞かせてもらっているけど、彼は国が推進する原子力発電に反対運動をするような危険人物だけどあなたたちは大丈夫なの」 私たちは顔を見合わせた。慌てた代表者は、「私たちはごく普通の山の愛好家です。特に政治的な目的はありません」と弁明した。私は少々ばつが悪かった。チェルノブイリ原発事故後、広瀬隆氏の脱原発講演会に感化されての活動だったが反権力だとは思っていなかった。徳島市議会議員に当選してからの活動は機会あるごとに先生にお伝えし

ていたが、環境問題に関心のある無所属の人物ではなく、学生運動上がりの方の左翼か何かと思われていたのかもしれない。

ともかく話は元に戻って、持参された写真や資料を丹念に見られた後で、先生は「引き受けましょう」と断言された。「ただし、条件があるの。代表を引き受けるのは一年間のみですよ。そして私はまだ剣山に登ったことがないから、就任前に山頂の様子を直接見てからにしたい」と言われた。

早朝に徳島市内を出発して、曲がりくねった山道を車で登り標高一四〇〇メートルの見ノ越駐車場に着くと八時半ぐらいになっていた。そこからは山頂近くまで登山リフトがあるが、先生は登山道を山頂まで登ると決められていた。四月一六日当日は山開き前ということもあって、まだ道の整備はされていない。日陰にはいくらか雪が残っていたし、ぬかるんでいる場所もあった。

真っ白の作務衣を着て白い運動靴姿の先生は長時間の乗車にもかかわらず元氣いっぱいだった。屈伸の準備運動ま

でしている。時間の余裕がなく早速出発する。杖を手にしているものの足取りは見るからに軽い。山道には木の根が張り出したり、倒木や浮石があつたりするので、経験豊かな山の会メンバーが先生の前後について足元を確認しながら登っていく。なだらかな道もあるが、急な上り坂や岩の張り出した場所もある。山登りに慣れた人にとれば剣山は初心者コースかもしれない。それでも約二時間の登山はそれなりにハードだ。先生は息せくこともなく、ひよいひよいと登っていく。メンバーが気を使って小まめに休憩をとるのだが必要ないぐらいだ。日頃より話されている、「元氣」という病気なのか。出家の修行で体験済みなのか。インドに行ってもどこに取材旅行しても若い編集者がついていけないくらい足腰は人一倍強いそう。曇り空だったが晴れ間が見えてきた。山の天候は変わりやすいのでメンバーは大きなザックに一式を入れている。

七〇歳の先生は山の会の人たちに一步も遅れることなく山頂に着いた。無残な笹の様子を見た先生は、メンバーに質問をした。なぜこんな風になったの、人が通るところと通れないところを区別すべきではないのかなど、次々と疑問がわくようだ。いつの間にか雲が切れて青空が広がってい

る。私は山頂標識の前で先生の写真を撮らせてもらった。登山当日の夜には、「剣山の笹をよみがえらせる会」設立総会が開催され、寂聴先生が会長に就任し剣山視察の報告もされた。行動する作家の面目躍如たるものがある。

その後の運動は順調に進行し、わずか一年で山頂の土砂流出を防ぎ、笹を保護するための木道設置の計画が県によつて作成、工事が開始された。

現在の剣山山頂は、立派な木道が整備され広々とした展望テラスもあり、木道の周辺には黒々とミヤマクマザサが国定公園らしく誇らしげに生い茂っている。

それにしても、この時期は「源氏物語」の現代語訳に取り組み始めたところであり、連載もぎつしりで多忙を極めていたはずである。それでも徳島のためになることであつたら、なんでもしようという覚悟が伝わってきた。

後日、先生と寂聴塾生の集まりが徳島であつたとき、剣山登山の話がされた。

「高い山は、霊山と言つて神聖な場所。空気が清らかで背筋がすつと伸びるものよ。登山リフトを使わずに山道を登ると言つたら、私がおばあちゃんだと思つて、前と後ろに

ザックを背負った山男が囲むようにして歩くからむさくるしい様な。もう少し離れて歩いてくれればと思っても言えないでしょ。心配してくれているんだから。何度も休憩するのでもっと早く進んでもいいと思ったくらい。道にはところどころ雪が残っていたけど、心地よい汗をかいて、山頂に着いたときはいい気分ね。曇っていた空も私の念力で晴れてきて、爽やかだったのよ。帰りも前後に案内役付きでゆっくり降りるから追い抜きそうになって……」

例によって、笑い声の絶えない楽しい寂聴節は続きました。



1993年4月16日 剣山山頂